

1. 文学部

I	文学部の教育目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・	1 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	・ ・ ・ ・ ・	1 - 4
	分析項目 I 教育の実施体制	・ ・ ・ ・ ・	1 - 4
	分析項目 II 教育内容	・ ・ ・ ・ ・	1 - 6
	分析項目 III 教育方法	・ ・ ・ ・ ・	1 - 10
	分析項目 IV 学業の成果	・ ・ ・ ・ ・	1 - 12
	分析項目 V 進路・就職の状況	・ ・ ・	1 - 15
III	質の向上度の判断	・ ・ ・ ・ ・	1 - 17

I 文学部の教育目的と特徴

1. (目的と基本方針) 学部教育の目的は、「教育基本法にのっとり、学術文化の中心として広く知識を授け、人文学の各分野にわたり、深く、かつ総合的に研究するとともに、完全なる人格の育成と文化の創造を期し、民主的、文化的な国家及び社会の形成を通じて、世界の平和と人類の福祉に寄与する」ことにある。この目的を追求するため、文学部では、「人間への洞察力と言葉への関心をもち、心と行為を考える人文学に論理的思考力をもってアプローチする意欲のある人材を育成」することを教育の基本方針としており、これは、名古屋大学学術憲章の教育に関する基本的目標「自発性を重視する教育実践によって、論理的思考と想像力に富んだ勇気ある知識人を育てる」を人文学の分野で実現しようとするものである。

2. (目標と方針) 文学部では、教育目標として「人間への洞察力」「言葉への深い関心」「心と行為に対する探究心」を掲げ、次の方針の下に、その目標の達成を図っている。
(1) 古今東西にわたる人間の精神的所産に広く親しむ機会を与え、人間の精神活動に対する多面的な関心をはぐくむ。(中期目標M1-中期計画K2と対応)

中期目標M1

質の高い教養教育と専門教育を教授し、国際的に評価される教育成果の達成を目指す。

中期計画K2

全学教育、学部、大学院の間における教育内容の一貫性の向上を図る。

(2) 文献資料の精読を通して、論理的な考え方を身につける。(中期目標M3-中期計画K10と対応)

中期目標M3

魅力ある独自の教育プログラムを提供し、優れた人材の育成を図る。

中期計画K10

魅力ある教育プログラムを提供し、それに沿った実効ある教育を実施する。

(3) フィールドワークも積極的に取り入れ、ものごとを実証的に解明する姿勢を身につける。(中期目標M1-中期計画K3と対応)

中期目標M1

質の高い教養教育と専門教育を教授し、国際的に評価される教育成果の達成を目指す。

中期計画K3

領域型分野及び文理融合型分野の専門教育の充実を図る。

(4) 自らの考えを口頭あるいは文章で筋道だてて説明する訓練を通して、高い言語運用能力を身につける。(中期目標M1-中期計画K5と対応)

中期目標M1

質の高い教養教育と専門教育を教授し、国際的に評価される教育成果の達成を目指す。

中期計画K5

高度専門職業人養成を始めとする生涯教育体制の充実を図る。

3. (組織の特徴・特色) 平成8年の大講座化に伴い、従来の3学科から人文学科1学科に改組した。この改組の目的は、従来の専門分野にとらわれることなく、広い視野に立った学部教育を可能にすることにあった。なお、平成13年の環境学研究科発足に伴い、社会学・心理学・地理学講座の大学院課程は環境学研究科に移行した。教育活動の基盤は12の講座と20のそれに属する専門分野(研究室)にあり、少人数教育によるきめ細かな指導に特色がある。

4. (入学者の状況等) 文学部の定員は 125 名(3、4 年次は 3 年次編入学生を含め 135 名)で、入学者数はほぼ定員どおりである。従来、前期課程、後期課程入試を実施してきたが、より多様な人材を受け入れるべく、平成 20 年度入試から後期課程入試を廃止し、推薦入試を導入した。また、3 年次編入学試験により十数名を受け入れている。
5. (進路・就職の状況) 卒業生の約 4 分の 3 は民間企業、官公庁、中高等学校等に就職し、約 4 分の 1 が名古屋大学文学研究科をはじめとする大学院に進学している。

【想定する関係者とその期待】

文学部の教育活動に対する第一義的な関係者としては、在学生・受験生及びその家族、卒業生、卒業生の雇用者を想定しており、人間の精神的所産に対し多面的な関心を持ち、人間の精神活動に関わる諸問題を論理的・実証的に考察できる、深い教養を持った人材の育成に、その期待はあると考えている。さらに、第二義的な関係者としては、地域社会の関係者があり、教養ある人材が地域社会で活躍することによって、その地域の文化的な活力が高まることに期待があると考えている。

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 教育の実施体制

(1) 観点ごとの分析

観点 1-1 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

文学部は人文学科 1 学科からなり、学士課程における教育目標を達成するため、4つのコースが置かれ、20の専門分野(研究室)単位で教育活動が行われている。このような内部構成により、学生は、広い視野に立って人文学の多様な分野を学ぶことができ、また、関心を持った分野については専門的に深く学ぶことが可能になっている。【資料 I-1-1、別添資料 I-A 参照】

資料 I-1-1 文学部のコースと専攻課程

コース	専攻課程 (括弧内は専門分野)
哲学・文明論	哲学(哲学、西洋古典学)、東洋学(中国哲学、中国文学、インド文化学)
歴史学・文化史学	日本史学、東洋史学、西洋史学、美術史学・考古学(美学美術史学、考古学)
文学・言語学	日本文学・日本語学(日本文学、日本語学)、言語学、西洋文学・西洋語学(英米文学、フランス文学、ドイツ文学、英語学)
環境・行動学	社会学、心理学、地理学

【出典：2008年度名古屋大学文学部学生便覧p.41】

教員定員は、設置基準等の関連法令に基づいて定められており、大学設置基準の改正に対応して、教授・准教授・講師・助教・助手が置かれている。現在の教員数は75名で、定員に欠員はない(環境学研究科文学部併任教員を含む)。欠員が生じた場合は、人事調整委員会が部局全体の適切な教員配置を総合的に検討し、速やかに人事の提案を行うことで、人事の停滞を招かないようにしている。人事の際は、「教授・准教授選考申し合わせ」に基づき、教育内容に見合った研究業績を持つ優秀な人材の確保に努めている。採用人事においては公募制を採っており、年齢構成や男女のバランスにも配慮した人事を行っている。こうした取り組みの結果、どの研究室にも、教授 1 准教授(又は専任講師) 1 が最低限配置され、学部生の指導に支障のない体制が確保されている。助教は特定の研究室に所属せず、文学部の基礎的な教育の一部を担っている。教育課程の展開に必要な教育支援者、TA等の教育補助者の活用も図っている。【資料 I-1-2、I-1-3、別添資料 I-A 参照】

資料 I-1-2 文学部の人事における公募の割合

	採用件数	公募件数	公募割合
平成16年度	2	0	0
平成17年度	0	0	0
平成18年度	4	1	25%
平成19年度	3	3	100%

【出典：文系総務課記録】

資料 I-1-3 文学部教員(環境学研究科文学部併任教員を含む)の年齢別男女別構成 (平成19年度)

	男性	女性	計
20歳代	0	0	0
30～34歳代	1	1	2
35～39歳代	9	1	10
40～44歳代	10	4	14
45～49歳代	14	2	16
50～54歳代	11	1	12
55～59歳代	16	0	16
60～63歳代	5	0	5
計	66	9	75

【出典：文系総務課記録】

学生定員は各学年 125 名(3、4年次は3年次編入学生を含め 135 名)、合計 520 名で、教員一人当たりの学生数は一学年につき 2 名弱となり、どの学生にも十分な指導が行える人数になっている。研究室ごとの学生数には多少ばらつきがあるが、特定の研究室に集中しないよう、教員一人当たり一学年 4 名という受入れ人数の目安を設けている。学部学生の数は、3年次編入学生を含めて、ほぼ定員どおりとなっている。【資料 I-1-4、I-1-

5 参照】

資料 I-1-4 文学部の学生定員と現員(入学者数推移) 各年5月1日現在数

	1年		2年		3年		4年		計	
	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数	定員	在籍者数
平成15年度	125	135	125	152	135	148	145	182	530	617
平成16年度	125	138	125	144	135	153	135	180	520	615
平成17年度	125	136	125	152	135	141	135	178	520	607
平成18年度	125	140	125	146	135	153	135	180	520	619
平成19年度	125	133	125	147	135	152	135	184	520	616

【出典：文系教務課記録】

資料 I-1-5 文学部の研究室別学生数(平成19年度)

	2年	3年	4年	計
哲学	3	6	6	15
西洋古典学	4	5	0	9
中国哲学	4	2	0	6
中国文学	0	0	4	4
インド文化学	2	0	0	2
日本史学	15	11	22	48
東洋史学	5	7	7	19
西洋史学	16	13	16	45
美学美術史学	5	14	16	35
考古学	6	6	8	20
日本文学	8	10	11	29
日本語学	7	8	12	27
言語学	13	15	12	40
英米文学	8	3	10	21
フランス文学	0	4	5	9
ドイツ文学	4	1	3	8
英語学	11	11	16	38
社会学	18	19	12	49
心理学	9	11	15	35
地理学	9	6	9	24
合計				483

【出典：文系教務課記録】

1、2年次の全学教育を企画運営する組織として教養教育院が置かれており、大学全部の教員が全学教育を担う登録教員となっている。

別添資料 I-A 名古屋大学文学部組織図および教員配置一覧

観点1-2 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

(観点に係る状況)

各コースから1名ずつ選出された委員と副研究科長で構成する学務委員会が随時開催され、教育活動の実施に関わる諸事項の検討、決定を行い、また、学務委員会の提案に基づいて、教授会で必要な議決を行う体制が整えられている。平成17年度は15回、平成18年度は25回、平成19年度は10回開催された。また、教員の教育活動の評価、検証を行うため、副研究科長および数名の室員からなる教育研究推進室を設置し、教育研究プロジェクトの企画、授業評価アンケートの分析、教育環境の整備など、教育研究体制を総合的に評価し、改善するための活動を行っている。【別添資料 I-B、I-C 参照】

ファカルティ・ディベロップメントは、教育研究推進室と学務委員会が共同で企画を立案し、毎年2回、教員を対象にした研修を行っている。これまでに、カリキュラムのあり方、授業評価のあり方、成績評価のあり方、TAの活用法などについて研修を行い、これらの問題に関する教員の理解を深め、教育の現状について認識を共有することができた。また、教育研究推進室による自己評価に加え、順次研究室ごとのピア・レビューを実施してきたほか、国内外の優れた研究者5名からなるアカデミック・アドヴァイジング・コミッティを設置し、随時、外部からの意見も聴取している。これらの取り組みの結果、教育活動上の懸案について、教員同士が随時意見を交換できる雰囲気醸成されつつある。授業内容の改善やカリキュラムの改革などは、可能なものから随時実施されており、それぞれ一定の効果をあげている。【資料 I-2-1、I-2-2、I-2-3 参照】

名古屋大学文学部 分析項目Ⅰ・Ⅱ

資料Ⅰ-2-1 ファカルティ・ディベロップメント開催実績一覧

年度	開催日	講演者	題目	報告書
17	6月8日	山田弘明、天野政千代	コア・カリキュラム、人文学講義について	
17	2月24日	山田弘明、天野政千代、鳥居朋子(高等教育研究センター)他	人文学講義の来し方行く末	「文学部共通コア・カリキュラムの研究と開発」報告書
18	6月14日	鳥居朋子(高等教育研究センター)	厳格な成績評価に向けて 明確な成績評価基準とは何か	
18	3月14日	G.W.フライ(ミネソタ大学)	ティーチングアシスタントの効果的な活用法	メタブティヒアカ創刊号所収
19	6月13日	栗本英和(総合企画室)	教育の評価について考える	メタブティヒアカ第2号所収
19	12月5日	大塚雄作(京都大学)	教員の教育活動の評価について	メタブティヒアカ第2号所収

【出典：文学研究科教育研究推進室資料】

資料Ⅰ-2-2 ピア・レビュー開催実績一覧

年度	開催日	対象研究室	報告書
13	9月28日	言語学、インド文化学、西洋史学、美学美術史学、日本文学、英米文学	外部評価ピア・レビュー報告書(2002年3月)
16	7月20日	比較人文学、中国哲学、中国文学、日本史学、日本語学、フランス文学、英語学	外部評価ピア・レビュー報告書(2005年3月)
18	7月28日	日本文化学、哲学、西洋古典学、東洋史学、考古学、ドイツ文学	外部評価ピア・レビュー報告書(2007年3月)

【出典：文系総務課記録】

資料Ⅰ-2-3 アカデミック・アドヴァイジング・コミッティ委員名簿

1. V. N. Jha / University of Pune (インド哲学)
2. Gisèle Seginger / Université Paris-Est (フランス文学)
3. Joseph G. Manning / Stanford University (西洋史)
4. 宮川 繁 / Massachusetts Institute of Technology (言語学, 比較文化論)
5. Patrick Geary / University of California at Los Angeles (ヨーロッパ中世史)

【出典：文系総務課記録】

別添資料Ⅰ-B 名古屋大学文学部各種委員会委員一覧

別添資料Ⅰ-C 名古屋大学文学部・文学研究科教育研究推進室内規

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)期待される水準にある。

(判断理由)教育課程を遂行するために必要な教員が定員どおり確保され、かつ教員の配置も教育内容に合致していて、社会に向けて公表された教育目標の達成が可能な体制が整っている。また、学生数は教員数に見合っている。したがって、観点1-1に関しては期待される水準にある。一方、教育方法・教育内容を点検し、改善するための体制の整備状況も、FD研修や教員同士の日常的な意見交換によって問題の共有が図られており、授業改善につながる提案も随時実行に移されているので、観点1-2に関しても期待される水準にある。

分析項目Ⅱ 教育内容

(1) 観点ごとの分析

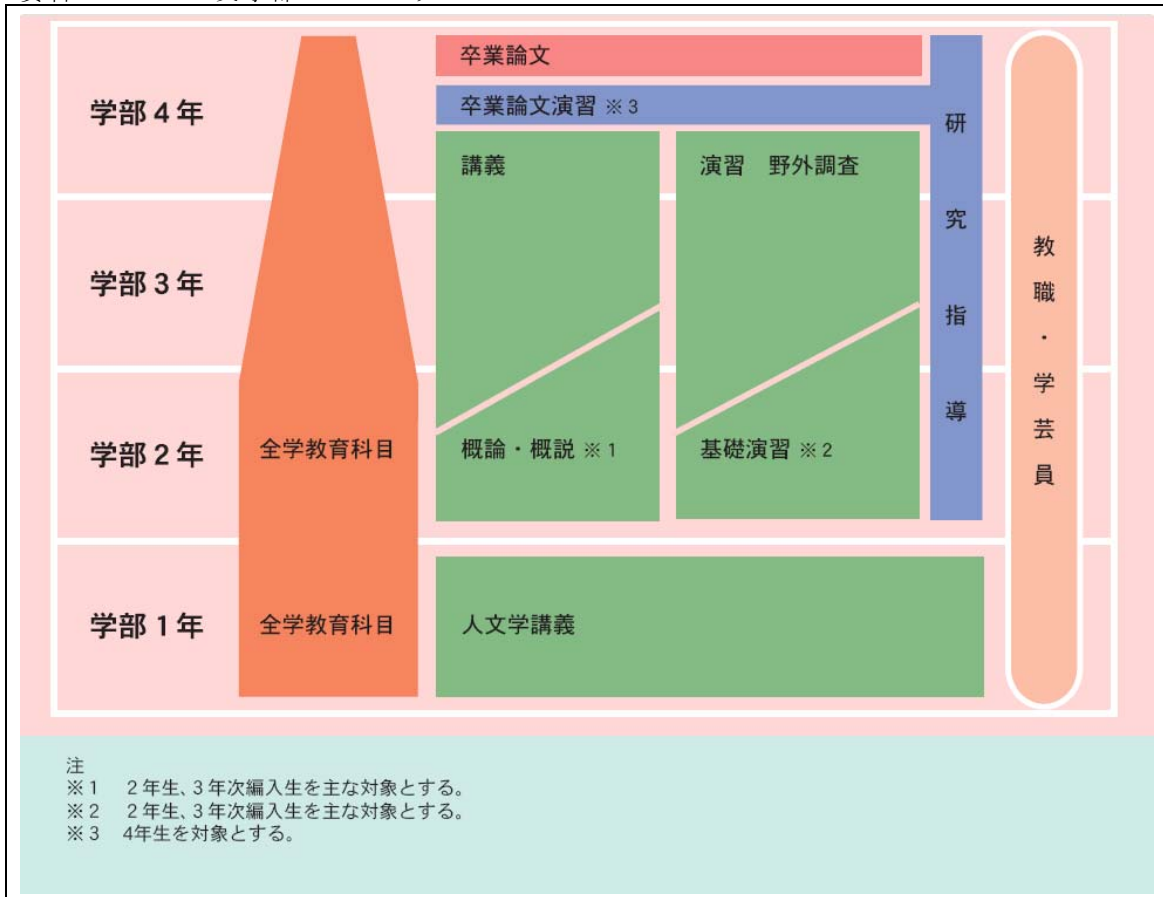
観点2-1 教育課程の編成

(観点に係る状況)

名古屋大学は研究を主とする大学であるため、文学部の教育課程は、それ自体として十分な体系性を持つと同時に、大学院の教育課程との連続性も考慮に入れて編成されている。教育課程を明示するため、コースツリーが策定されており、コースツリー上の個々の授業

科目は、部局および各コースの教育方針に対応して設定されている。文学部の教育課程は全学教育と専門教育が楔形に配置されており、専門教育については、1年次生向けに、学問分野としての人文学を概観するための授業として「人文学講義」が開講されている。また、2年次生向けには、概論・概説や基礎演習が開講され、3年次以降の専門教育への導入を行っている。個々の授業は、教育内容にふさわしい研究実績を持つ教員が担当しており、最新の研究成果を踏まえた教育が行われている。また、教育課程の編成は、学務委員会が責任を持って統括している。人材育成の観点からは、教職・学芸員資格取得のための科目を開講し、専門職への就職にも対応できる体制をとっている。【資料Ⅱ-1-1、Ⅱ-1-2、Ⅱ-1-3、別添資料Ⅱ-A参照】

資料Ⅱ-1-1 文学部コースツリー



【出典：名古屋大学文学部案内 2006-2007, p. 3】

資料Ⅱ-1-2 各コースの教育方針

- 【哲学・文明論コース】 知の源泉と文明の基層を東西の思想、倫理、文学などの古典文献の中に探り、人間の精神的営みに関する諸問題を論理的・実証的に解明する能力を養う。
- 【歴史学・文化史学コース】 過去の人間の営みを、残された文献史料を読み解き、美術作品や遺物を観察し、またフィールドワークを行うことなどを通して、実証的に明らかにすることにより、人間や社会を歴史的に洞察することのできる人材を養成することを目標とする。
- 【文学・言語学コース】 文学及び言語に対する知的好奇心を育むとともに、その実証的分析によって専門的教養を高め、人間の精神活動の本質に迫る。
- 【環境・行動学コース】 社会学・心理学・地理学の3講座の専門分野で編成されるコースで、個人の意識現象から社会システムにいたるまでの様々な精神的所産を、とくに環境と行動との相互作用という視点から科学的・論理的に考察することにより、人間の心と行為に関する多面的な理解を目指す。

【出典：2008年度名古屋大学文学部学生便覧 p. 15】

名古屋大学文学部 分析項目Ⅱ

資料Ⅱ-1-3 文学部の卒業要件(単位数一覧)

区分		単位	小計	合計	
全学基礎科目	基礎セミナー	基礎セミナーA	2	4	26
		基礎セミナーB	2		
	言語文化	英語	8	18	
		英語以外の外国語	10		
		日本語(留学生のみ)	10		
	健康・スポーツ	講義	2	4	
実技		2			
文系基礎科目				8	
理系基礎科目				4	
文系教養科目				4	
理系教養科目				4	
全学教養科目				2	
専門系科目	専門基礎科目	2		84	
	専門科目				
	関連専門科目				
総計				132	

※専門系科目は卒業論文10単位を含む 【出典：2008年度名古屋大学文学部学生便覧 p.16】

文学部では、教育目標を達成する上で、卒業論文の作成を特に重視している。そのため、授業に加え、学生に対する個別の研究指導にも力を入れており、各教員がオフィスアワーを設けているほか、オフィスアワー以外の時間帯にも、学生からの質問や履修計画等に関わる相談に随時応じている。各研究室には最低2名の教員が配置されており、多くの研究室で複数の教員による演習・発表形式の合同授業が行われているため、研究テーマが一人の教員の指導によって左右されることはない。卒業論文の水準は、論文提出後に行われる口述試験によって担保されている。

別添資料Ⅱ-A 各コースにおける専攻課程の必修科目、選択必修科目及び単位数

観点2-2 学生や社会からの要請への対応

(観点に係る状況)

学生や社会に対し、文学部における人材育成の目的を明確にするため、アドミッションポリシーおよび教育目標を、Web サイトや案内冊子、募集要項に明記している。また、高校生に対しては、オープンキャンパスや学校訪問、出張講義などの機会を通して周知を図っている。多様な学生を受け入れることによって教育効果を高めるために、前期入試と後期入試を行ってきたが、平成20年度から、後期入試の代わりに推薦入試を導入し、一層多様な学生の獲得を目指すこととした。また、明確な目的意識を持つ学生を3年次編入学生として受け入れることで、教育の活性化を図っている。なお、3年次編入学生に対しては、全学共通科目の履修を免除し、専門教育の授業に専念できる措置を取っている。その他、名古屋大学文学部で学ぶ機会を提供するため、科目等履修生や聴講生、研究生も積極的に受け入れている。また、愛知学長懇話会による単位互換制度に基づき、一部の授業を近隣の大学の学生に開放している。【資料Ⅱ-2-1、Ⅱ-2-2、Ⅱ-2-3、Ⅱ-2-4、Ⅱ-2-5参照】

資料Ⅱ-2-1 名古屋大学文学部アドミッションポリシー

人間への洞察力と言葉への関心を持ち、心と行為を考へる人文学に論理的思考力を持ってアプローチする意欲のある人を求めます。

【出典：名古屋大学文学部案内2008, p.25】

資料Ⅱ-2-2 高校訪問、出張講義実施実績一覧

高校訪問			
平成18年度		平成19年度	
09/08	三重県立津西高校	06/08	私立愛知淑徳高校
09/14	岐阜県立斐太高校	06/14	名古屋大学附属高校
09/27	愛知県立刈谷高校	06/25	愛知教育大学附属高校
10/14	岐阜県立鷺谷高校	07/19	私立滝高校
10/15	河合塾ガイダンス	09/13	岐阜県立斐太高校
10/28	私立高知学芸高校	09/28	愛知県立刈谷高校

11/09	愛知県立豊田西高校	10/05	三重県立津西高校
11/16	愛知県立豊田北高校	10/07	河合塾ガイダンス
11/24	愛知教育大学附属高校	11/08	愛知県立豊田西高校
12/14	名古屋市立桜台高校	11/15	愛知県立豊田北高校
03/26	河合塾ガイダンス		

大学見学			
平成 18 年度		平成 19 年度	
06/28	愛知産業大学三河高校	08/08	金沢二水高校

【出典：文系教務課記録】

資料Ⅱ-2-3 3年次編入学生受入状況

入学者数	経歴	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
	4 年生大学卒業	7	3	3
	短期大学卒業	2	0	2
	高等専門学校卒業	2	1	1
	専修学校卒業	2	0	0
	外国大学卒業	0	0	0
	大学在学(退学)		10	8
	計	13	14	14
	入学定員	10	10	10

【出典：文系教務課記録】

資料Ⅱ-2-4 科目等履修生、聴講生、研究生受入状況

	科目等履修生	聴講生	研究生	特別聴講学生
	5/1 現員			
平成 17 年度	10	18	7 (3)	10
平成 18 年度	10	14	15(10)	8
平成 19 年度	8	16	20(16)	9
	11/1 現員			
平成 17 年度	11	16	8 (4)	9
平成 18 年度	11	18	21(13)	4
平成 19 年度	9	19	28(23)	17

研究生の括弧内は留学生で内数、特別聴講学生は短期交換留学生。

【出典：文系教務課記録】

資料Ⅱ-2-5 愛知学長懇話会単位互換制度開放科目一覧

	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
科目名	ドイツ文学講義	ドイツ文学講義	ドイツ文学講義
	ドイツ文学講義	ドイツ文学講義	ドイツ文学講義
	日本精神史		環境心理学講義

【出典：文系教務課記録】

学生のキャリア形成のニーズに対しては、必要に応じて他学部の授業の聴講も認めているほか、海外の大学への留学を推進する体制をとっており、NUPACE 協定校をはじめ、外国の大学で取得した単位の卒業単位への互換が行われている。また、進路問題対策委員会を設置し、進路に関する情報を提供すると共に、随時、就職活動セミナーを開催しているほか、インターンシップの充実に向けて検討を進めている。【資料Ⅱ-2-6、Ⅱ-2-7 参照】

資料Ⅱ-2-6 短期交換留学制度による学生の派遣実績一覧

平成 17 年度	韓国	漢陽大学
	イギリス	ブリストル大学
平成 18 年度	フランス	グルノーブル大学連合
	アメリカ	ノースカロライナ州立大学
	アメリカ	ノースカロライナ州立大学
	アメリカ	ニューヨーク大学
	オーストラリア	フリントマス大学
平成 19 年度	アメリカ	シンシナティ大学
	アメリカ	南イリノイ大学
	アメリカ	セント・オラフ大学
	イギリス	シェフィールド大学
平成 19 年度	フランス	グルノーブルコンソーシアム
	フランス	グルノーブル第三大学
	デンマーク	コペンハーゲン大学
	イギリス	シェフィールド大学

【出典：文系教務課記録】

資料Ⅱ-2-7 就職活動セミナー開催実績一覧

年度	開催日	名称	講師
18	12月21日	文学部生のための就職活動支援セミナー	寺西哲也(東海ゴム)

名古屋大学文学部 分析項目Ⅱ・Ⅲ

18	1月25日	女子学生のための就職セミナー	中部電力・デンソー・豊島株式会社・トヨタファイナンス・名鉄・パソナ・日立製作所・三菱東京UFJ銀行 各担当者
19	5月17日	2007 教職セミナー	仙石美沙子(帝京大学可見高校)、久木田有子(名古屋市立工業高校)、館紅仁子(岐阜県立東濃フロンティア高校)
19	11月26日 11月27日 11月29日 11月30日	文系学生のための業界研究ウィーク2007	矢作建設・NTTデータ東海・中部経済新聞社・住友信託銀行 各担当者
19	12月20日	文学部学生のための就職セミナー2007	中村優一郎(エン・ジャパン)、高橋敏正(矢作建設工業)
19	1月24日	女子学生のための就職セミナー	トヨタファイナンス・豊島株式会社・デンソー・ブラザー・日立製作所・リクルート・パソナ・名鉄・松坂屋・中部電力 各担当者

【出典：文学研究科進路問題対策委員会資料】

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由) 教育目標を達成するのに必要な教育課程が、コースツリーに則って編成されており、教育課程による教育の成果は、卒業論文の厳格な審査によって担保されている。したがって、観点2-1に関しては期待される水準にある。一方、文学部における人材育成の目的は社会に広く公開されており、その目的に適合する多様な人材を受け入れ、キャリア形成のためのさまざまな機会を提供しているので、観点2-2に関しても期待される水準にある。

分析項目Ⅲ 教育方法

(1) 観点ごとの分析

観点3-1 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(観点に係る状況)

授業形態には講義(概論、概説、特殊研究を含む)、講読、演習、実習があり、それらの中から教育目標を達成するのに最も効果的な授業形態が選択されている。フィールドワークも重視されており、現地調査の手法の習得に力を入れている。情報リテラシーに関しては、情報担当教員による学部共通授業「情報学演習」「電子テキスト学」を開講している。多くの授業で少人数教育が行われており、学生のニーズと学力に合わせたきめ細かな指導が行われている。【資料Ⅲ-1-1、Ⅲ-1-2、Ⅲ-1-3参照】

資料Ⅲ-1-1 学部開講形態別開講授業数(平成19年度)

	開講科目数			
	前期	後期	通年	計
講義	29	35	0	64
概論	10	10	1	21
概説	4	2	0	6
特殊研究	40	35	3	78
講読	11	12	1	24
演習	80	86	18	184
実習	3	3	4	10
その他	3	3	0	6
計				393

【出典：文系教務課記録】

資料Ⅲ-1-2 学部授業科目履修登録者数一覧(平成19年度)

履修登録者数	科目数
0名	26
1~5名	99
6~10名	97
11名~20名	93
21名~30名	50
31名以上	96
合計	461

【出典：文系教務課記録】

資料Ⅲ-1-3 文学部共通科目および開講コマ数 (平成19年度)

ラテン語	2	情報学演習	2
ギリシア語	2	電子テキスト学	4
サンスクリット語	2	テキストと文化	0
パーリ語	0	社会言語学	2
イタリア語	2	博物館概論	1
書道	2	博物館経営論	1
日本精神史	1	博物館資料論	1
文化人類学	6	博物館情報論	1
宗教人類学	1	博物館実習	2
比較文化演習	3		
日本文化学講義	14		
日本文化学演習	8		

【出典：文系教務課記録】

1年次生向けには、2年次からの研究室分属に先立ち、ガイダンスやオリエンテーションを実施している。また、年度の初めには、部局および研究室ごとのガイダンスを行い、コースツリーや履修モデルと個々の授業の対応関係や、個々の授業の履修によって達成されるべき教育目標について説明を行っている。また、授業の目的や内容、方法等については、シラバスに明記すると共に、初回の授業でも説明し、受講生に周知している。【資料Ⅲ-1-4、Ⅲ-1-5、別添資料Ⅲ-A参照】

資料Ⅲ-1-4 専攻分属ガイダンス開催日程 (平成19年度)

日 時：平成19年10月3日(水) 14:45~18:00
場 所：文学部 237 講義室、文系共同館 1AB
<237 講義室>
14:45~15:05 セクション1 環境・行動学コース (社会学・心理学・地理学)
15:15~16:05 セクション2 文学・言語学コース (日本文学・日本語学・言語学・英米文学・フランス文学 ・ドイツ文学・英語学)
16:15~16:50 セクション3 哲学・文明論コース (哲学・西洋古典学・中国哲学・中国文学・インド文化学)
17:00~17:35 セクション4 歴史学・文化史学コース (日本史学・東洋史学・西洋史学・美学美術史学・考古学)
<文系共同館 1AB>
16:00~18:00 各研究室の学部生、大学院生が待機

【出典：文系教務課記録】

資料Ⅲ-1-5 専攻分属オリエンテーション開催日程 (平成19年度)

日 時：平成19年10月17日(水) 15:00~
場 所：文学部 237 講義室、各研究室
15:00~ 志望専攻調査票等配付 (237 講義室)
15:30~ 第一志望各専攻オリエンテーション (各研究室)
16:30~ 第二志望各専攻オリエンテーション (各研究室)

【出典：文系教務課記録】

授業には、必要に応じて大学院生の TA がつき、大学院との同時開講授業では、大学院生が同席することによって、学生がより高度な理解に到達できるよう配慮している。【資料Ⅲ-1-6参照】

資料Ⅲ-1-6 TA採用実績一覧

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
TA	131	135	129	135
全学TA	6	7	11	10

【出典：文系総務課記録】

別添資料Ⅲ-A 平成19年度文学部シラバス

観点3-2 主体的な学習を促す取組

(観点に係る状況)

学生は履修モデルに従って授業を履修するが、履修する授業が完全に決まっているわけではなく、各自の関心に合わせ、一定の範囲で授業を選択することができる。その際、学生が主体的に授業を選択できるよう、各授業の目的とコースツリー上の位置づけをシラバスに明記すると共に、授業の内容についてもできるだけ具体的に記述している。シラバスには、教科書・参考書や予習・復習、宿題・課題等に関する指示も記載しており、その授業を受講している学生が、自宅でも学習できるよう配慮している。また、学生が主体的に学習を進めるにあたって目標を定めやすいよう、成績評価の方法と基準も明記している。これらの情報を記載したシラバスは Web 上で公開されており、いつでも参照できるようになっている。【別添資料Ⅲ-A参照】

研究室に所属している学生には、指導教員が複数決まっているが、学生の主体的な学習を支えるため、全教員がオフィスアワーを設けているほか、電子メールアドレスを学生便覧に記載し、学習に関する相談がいつでも可能な態勢をとっている。所属していない1年次生に対しても、4つのクラスのそれぞれに、文学部の教員が担任として配置されており、直接コンタクトが取れるようになっている。

学生の主体的な学習を環境面でバックアップするため、各研究室に1部屋ずつ、学習に必要な図書を備えたリテラチャー・ラボが配置されており、学生はそこで自由に学習することができる。また、文学部の研究棟は全室午後十時半までに退室することになっているが、必要がある場合は、指導教員の承認を得て、それ以降も使用できるよう配慮している。

【資料Ⅲ-2-1参照】

資料Ⅲ-2-1 文学部棟用途別部屋数

	リテラチャー・ラボ	大学院生室	資料室、実験室等	教員研究室
文学部棟1階	2	1	1	5
文学部棟2階	5	5	5	16
文学部棟3階	6	7	3	21
文学部棟4階	8	7	0	21

【出典：2008年度文学部学生便覧 pp. 4-7】

(2)分析項目の水準及びその判断理由

(水準)期待される水準にある。

(判断理由)教育目標を達成するために最も効果的な授業形態が選択され、少人数教育やTAの活用など、学生の立場に立った学習指導法が工夫されている。したがって、観点3-1に関しては期待される水準にある。一方、主体的な学習を行う際の指針となるシラバスが整備され、主体的な学習を行う環境も、リテラチャー・ラボの設置やメールアドレスの公開によって確保されているので、観点3-2に関しても期待される水準にある。

分析項目Ⅳ 学業の成果**(1)観点ごとの分析****観点4-1 学生が身に付けた学力や資質・能力**

(観点に係る状況)

文学部の教育課程で学生が身につけるべき学力や資質・能力は、「人間への洞察力」、「ことばへの深い関心」、「心と行為に対する探究心」であり、アドミッションポリシーや教育目標として、募集要項、Webサイト、案内冊子等に明記している。

3年次への進級にあたっては、進級要件を設けており、専門教育を履修するに足る学力が身につけているかどうか、確認する体制をとっている。授業は、必要な開講回数を確保するとともに、単位の実質化のため、参考図書・準備学習等に関する指示をシラバスで周知するなどの取組を行っている。また、シラバスに、各授業の教育目的と文学部の教育目

標の対応を明記している。成績評価は、シラバスに明記された規準・方法に基づいて厳正に行われているが、著しい偏りが無いことを確認するため、教育研究推進室で成績評価の分布状況を点検している。授業の成果や効果については、授業ごとに実施される授業評価アンケートで確認している。授業評価アンケートの結果は、教育研究推進室で分析し、教員にフィードバックして、授業改善に役立てている。各研究室では、授業以外に、卒業論文作成に向けた懇切な研究指導を行っており、標準修業年限内での卒業率を高水準に保っている。卒業論文に対しては、複数の教員による口答試問を行い、卒業論文を含めた取得単位について、教授会で厳正な卒業判定を行っている。【資料Ⅳ-1-1、Ⅳ-1-2、Ⅳ-1-3、Ⅳ-1-4、別添資料Ⅲ-A参照】

資料Ⅳ-1-1 3年次への進級要件

区分	単位	
全学基礎科目	基礎セミナー	4
	言語文化（2単位の不足者に限り仮進級を認める。）	18
	健康・スポーツ	4
文系基礎科目	10	
理系基礎科目		
文系教養科目	6	
理系教養科目		
全学教養科目		
専門系科目（専門基礎科目）	2	
合計	44	

【出典：名古屋大学平成19年度「全学教育科目履修の手引」 p.10】

資料Ⅳ-1-2 3年次への進級率

	2年次在籍者数 (a)	3年次進級者数 (b)	進級率% (b)/(a)
平成17年度	144	128	89
平成18年度	151	139	92
平成19年度	145	138	95

【出典：文系教務課記録】

資料Ⅳ-1-3 成績評価の分布状況（平成17年度）

科目種別	登録人数	欠席者	受験人数	優	%	良	%	可	%	不可	%
概論概説	823	295	528	312	59%	135	26%	51	10%	30	6%
特殊研究	2489	1068	1421	937	66%	349	25%	86	6%	49	3%
講読	143	7	136	98	72%	35	26%	2	1%	1	1%
演習	519	62	457	300	66%	124	27%	23	5%	10	2%
その他	215	42	173	134	77%	27	16%	9	5%	3	2%

【出典：学務情報システム】

資料Ⅳ-1-4 標準修業年限内の卒業率

	卒業者数 (a)	入学年度別卒業生数								標準修業 年限内の 卒業率% (b)/(a)
		8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度 (b)	14年度 (b)	15年度 (b)	
16年度	148		4	1	3	17	123			83
17年度	138			1	1	9	17	110		80
18年度	145			1		2	2	20	120	83

備考：平成16年度の標準修業年限内の卒業生とは、平成13年度入学者および平成15年度3年次編入生者で、平成16年度に卒業した者とする。【出典：文系教務課記録】

観点4-2 学業の成果に関する学生の評価

（観点に係る状況）

各授業の成果や効果は、授業ごとに実施される授業評価アンケートで確認している。平成18年度に実施した授業評価では、前期で84.2%、後期で87%の学生が「総合的にみて授業に満足した」と回答しており、おおむね高い満足度が得られている。また、「この授業で学習したことが、あなたの専攻領域を深めていくのに、役に立つと思いますか」という設問に対しては、前期で77.8%、後期で75.3%の学生が肯定的に回答している。【資料Ⅳ-2-1参照】

平成18年度末に当該年度の卒業生を対象に実施した成果調査では、145名の卒業生のうち125名から回答があり、「人間への洞察力」、「ことばへの深い関心」、「心と行為に対する探究心」という教育目標に対し、67%、73%、79%の学生がこれらの資質・能力を身につ

名古屋大学文学部 分析項目Ⅳ

けたと答えている。また、70-80%の学生が、こうした資質・能力は、学部専門教育（特に演習科目）および卒業論文作成によって養われたと考えている。このことから、教育目標に掲げた資質・能力を総合的に発展させる機会として、卒業論文が果たす役割は非常に大きいと考えられる。【別添資料Ⅳ-A参照】

資料Ⅳ-2-1 授業評価アンケート結果（平成18年度）

設問 いずれの設問も以下の選択肢から回答してください。

①あてはまる、②ややあてはまる、③あまりあてはまらない、④あてはまらない

- 問1 予習や宿題をしたり、参考文献を読むなど、授業時間以外でも学習に取り組みましたか。
 問2 授業の目標・趣旨について、教員からわかりやすく説明されましたか。
 問3 成績評価の方法・基準についてわかりやすく説明されましたか。
 問4 シラバスの記述は授業の履修に役に立ちましたか。
 問5 教員の話し方や教材・資料の提示の仕方など、授業の進め方は適切でしたか。
 問6 授業に関する質問の機会は与えられましたか。
 問7 教室の設備などの授業環境は適切でしたか。
 問8 この授業で知的な刺激を受け、さらに理解を深めたいと思いましたか。
 問9 この授業で学習したことが、あなたの専攻領域を深めていくのに、役に立つと思いますか。
 問10 総合的にみて授業に満足しましたか。
 問11 この授業の履修にあたって全学教育科目は役立っていましたか。

18年度前期

	回答1	回答2	回答3	回答4	無回答
問1	18.6%	25.6%	31.6%	24.2%	0.8%
問2	35.9%	49.0%	12.6%	2.4%	0.9%
問3	40.7%	43.9%	12.5%	2.9%	1.1%
問4	28.7%	48.3%	17.8%	5.2%	2.1%
問5	38.5%	45.2%	12.8%	3.4%	1.1%
問6	34.8%	36.5%	25.1%	3.7%	1.0%
問7	49.6%	37.0%	10.7%	2.7%	1.0%
問8	41.7%	43.7%	11.8%	2.8%	1.0%
問9	41.9%	35.9%	17.0%	5.2%	1.0%
問10	38.5%	45.7%	12.0%	3.9%	1.0%
問11	9.2%	25.4%	41.5%	23.9%	8.7%

18年度後期

	回答1	回答2	回答3	回答4	無回答
問1	18.8%	23.3%	35.1%	22.8%	2.3%
問2	38.9%	45.7%	14.1%	1.3%	2.3%
問3	44.8%	39.6%	13.9%	1.6%	2.5%
問4	33.9%	48.5%	14.1%	3.6%	2.9%
問5	44.0%	43.1%	10.6%	2.3%	2.5%
問6	31.0%	36.0%	28.9%	4.0%	2.3%
問7	47.2%	42.2%	9.0%	1.6%	2.3%
問8	46.3%	40.9%	10.9%	1.9%	2.5%
問9	43.4%	31.9%	20.2%	4.5%	2.3%
問10	45.7%	41.3%	10.6%	2.4%	2.3%
問11	10.2%	20.7%	43.5%	25.6%	9.4%

【出典：平成18年度授業評価アンケート実施状況報告書 p.3, p.8】

別添資料Ⅳ-A 平成18年度卒業時成果調査

(2)分析項目の水準及びその判断理由

(水準)期待される水準にある。

(判断理由)進級率、標準修業年限内の卒業率などの指標が全国的にも高い水準にあり、各授業や卒業論文などの教育の成果や質を管理する体制も整備されており、観点4-1は期待される水準にある。また、学生による授業評価や卒業時の学生を対象とした成果調査からも、教育課程の成果に対して高い満足度を示す結果が得られており、観点4-2は期待される水準にある。

分析項目 V 進路・就職の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 5-1 卒業後の進路の状況

(観点に係る状況)

平成 18 年度卒業生 145 名を対象とする進路状況調査によれば、60%が民間企業の多様な職種に偏りなく就職し、12%が官公庁職員、5%が教員として活躍の場を見いだしている。こうした状況は、教育目標に掲げた学力や資質・能力が培われ、幅広い分野で活躍できる人材が養成されていることを示している。また 23%の卒業生は大学院に進学しており、大学院課程での発展の基礎となる学力や素養を、文学部の教育課程を通じて身につけることができたことを示している。【資料 V-1-1 参照】

資料 V-1-1 進路状況 (平成 18 年度)

就職	民間企業	製造業	20
		情報通信業	13
		運輸業	7
		卸売・小売業	6
		金融・保険業	9
		不動産	1
		医療・福祉	2
		教育・学習支援業	7
		複合サービス業	3
		サービス業	10
		小計	78
	官公庁	17	
	教員	7	
	その他	1	
	合計	103	
大学院進学		33	
その他		9	
	総計	145	

【出典：文系教務課記録】

観点 5-2 関係者からの評価

(観点に係る状況)

平成 18 年度末から 19 年度初頭に、卒業後 3 年前後の卒業生を対象として実施した成果調査で、「人間への洞察力」、「ことばへの深い関心」、「心と行為に対する探究心」という教育目標に対し、69%、92%、81%の卒業生が、これらの学力や資質・能力を在学中に身につけたと回答した。また、各目標について、79%、92%、67%の卒業生が、こうした学力や資質・能力は、学部の専門教育課程（とくに演習科目）および卒業論文によって養われたとしている。また 65%の卒業生が、名古屋大学における教育活動が、社会が期待する水準をほぼ満たしていると回答している。【別添資料 V-A 参照】

平成 18 年度末から 19 年度初頭に、卒業後 3 年前後が経過した卒業生の職場の上司をはじめとする上長を対象として実施した調査で、90%超の上長が、名古屋大学の教育目的である「機会をつかむ行動」、「困難にいとむ行動」、「自律性と自発性を育む行動」を卒業生が心がけていると評価した。また、85%超の上長が、文学部の教育目標「人間への洞察力」、「ことばへの深い関心」、「心と行為に対する探究心」を卒業生が身につけていると評価している。また 76%の上長が、名古屋大学における教育活動が、社会が期待する水準をほぼ満たしていると回答している。【別添資料 V-B 参照】

別添資料 V-A 卒業生成果調査(平成 18-19 年度実施)

別添資料 V-B 卒業生上長成果調査(平成 18-19 年度実施)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由) 就職や進学に関する状況から、本学部の人材養成目的に合致した人材が養成さ

名古屋大学文学部 分析項目Ⅴ

れていることがわかり、観点5－1は期待される水準にある。また、卒業生やその上長を対象とした調査結果から、本学部の教育が教育目標に照らして高い成果を上げていることがわかり、観点5－2は期待される水準にある。

Ⅲ 質の向上度の判断

- ① 事例1「授業評価アンケートの実施とその活用体制の整備」(分析項目Ⅰ、Ⅳ)
(質の向上があったと判断する取組)

学生による授業評価アンケートは、平成17年度後期は講義系科目で実施し、平成18年度からは全ての科目で実施している。授業評価アンケートの結果を授業改善に活用するため、平成18年度には教育研究推進室を設置し、「授業評価アンケート実施状況報告書」を刊行するなど、アンケート結果の分析や授業改善の具体例の把握に努めている。【資料Ⅳ-2-1参照】

- ② 事例2「ファカルティ・ディベロップメントの推進」(分析項目Ⅰ)
(質の向上があったと判断する取組)

平成17年度より、教育活動上の諸課題をテーマに、年2回のファカルティ・ディベロップメント研修を行い、その成果を報告書として刊行したり、学務委員会での議論に生かしたりして、恒常的な教育改善の取り組みに努めている。【資料Ⅰ-2-1参照】

- ③ 事例3「コースツリーの策定とシラバスの整備」(分析項目Ⅱ、Ⅲ)
(質の向上があったと判断する取組)

四年一貫教育の実施に伴い、専門教育の段階的な履修を明確化したコースツリーを策定した。また、シラバスは、平成17年度後期は講義系科目で作成し、平成18年度からは全ての科目で作成している。シラバスは電子化されており、Web上でいつでも閲覧することができる。シラバスには、授業の内容のほか、コースツリー上の位置づけ、目標、目標に対応した評価の方法、自宅学習の指示が明記されている。【資料Ⅱ-1-1、別添資料Ⅲ-A参照】